説教余滴 2021 年 1 月 3 日、ヨブ 22：11～28、

新しい年が恵まれますよう祈ります。
魁より始めよ、と言います。一年の初めは、聖書を読みましょう。旧約の 804 ページです。
ここは長いヨブ記の中でも、ヨブと三人の友人たちとの論争です。
主題は、ヨブの身に降りかかった災いは、ヨブがなにか神に対して罪を犯したためなのか、ということです。ヨブは断じて身に覚えがない、私は正しい、と言い張ります。
それに対して友人たちは、それこそヨブの傲慢であり、必ず神の御心に従わないことがあったに違いない、気付かない罪がある、と繰り返し語り、ヨブに迫ります。「神に帰れ」と。

彼ら三人はヨブの友人です。親しい友であり、彼らのうちに、悪意は見られません。
むしろ善意の塊、と言っても間違いはないでしょう。
残念なことに、人の善意が悪い結果をもたらす、善意が多くの人を傷付けてきた、ということは洋の東西を問わず事実です。塩野七生さんに拠れば、イタリアの諺は言います。
　　<地獄の敷石は善意、善意の音がする>。
善意が人を傷付け、人の優しさが人を増長させ、善悪の区別を誤らせてしまうのでしょうか。
　　<地獄は善意の敷石で敷き詰められている>。
英国やドイツなど欧州の諺で、『世界ことわざ大辞典』には「悪人の中には善意の行為を主張するやからが多い」との解説もあります。

クリスチャンには、よい人が多い、と考えられています。善人・善意の人です。私自身は、そうした良い人ではない、と考えていますが、それでも、新しい一年を良い人で生きたいものです。しかし、自己絶対化の過ちは犯したくありません。ちっぽけなこの身の経験や感情・感覚・思想を間違いないものと思い込み、他に押し付ける時、大きな悲劇とは言わないまでも、小さな悲しみを生み出すでしょう。
老いの繰り言かもしれません。それでも気を付けて行くことにします。